

# チャレンジデーに対する地域住民の評価

松原愛作\*, 山口春加\*\*, 萩裕美子\*\*\*, 川西正志\*\*\*\*, 藤本和延\*\*\*\*\*

## The evaluation of Challenge Day in community residents

Aisaku MATSUBARA\*, Haruka YAMAGUCHI\*\*, Yumiko HAGI\*\*\*,  
Masashi KAWANISHI\*\*\*\* and Kazunobu FUJIMOTO\*\*\*\*\*

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the evaluation of Challenge Day in community residents. Then, the questionnaire of Challenge day was carried out for community residents who live in “A” town at immediately after, four months later and one year later the “Challenge Day 2004” was held. The main results are as follows:

1. The evaluation of item about community residents’ participation was positive, and the evaluation of item about economic effect was not too positive in community residents who live in “A” town.
2. The evaluation of item about image-making and publicity in community tended to lower as time passed from Challenge Day was held.
3. The evaluation of item about sporting activities in community and chance for residents to exercise was nearly positive at all time (immediately after, four months later and one year later the Challenge Day was held).

Our results suggest that Challenge Day become chance of sports promotion in community because of development of sporting activities in community and improvement of consciousness to exercise and sports finally lead to sports promotion in community.

**KEY WORDS** : Challenge Day, evaluation, transition

### I. 緒言

SSF (笹川スポーツ財団) では、運動・スポーツを行なうきっかけづくりとして、住民参加型のスポーツイベント「チャレンジデー」を推奨している<sup>8)</sup>。チャレンジデーとは、住民の運動・スポーツを行なうきっかけづくりとして、1983年にカナダで開催された全国イベントの一つである。その後、カナダ国民の5人に1人が参加した最大の市民スポーツイベントとなり<sup>4)</sup>、今では世界中の国々にも普及しつつある。チャレンジデーの特徴は、

毎年5月の最終水曜日に、人口規模がほぼ同じ自治体同士で15分間以上継続して運動・スポーツを行なった住民の参加率(参加者数÷人口)を競う点であり、この点が他のスポーツイベントとは異なる最大の特徴でもある。そのため、チャレンジデー当日は年齢や性別に関係なく、多くの住民が自宅、地域の広場、職場、学校などのいろいろな場所で運動・スポーツに参加する。日本では1993年に初めて開催され、当初は参加自治体数1町、総参加者数4,925人と非常に規模が小さかったが、年々その規模は大きくなり、2004年には全国97ヶ

\*鹿屋体育大学大学院

\*\*特定非営利活動法人神戸アスリートタウンクラブ

\*\*\*鹿屋体育大学スポーツライフスタイル・マネジメント系

\*\*\*\*鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター

\*\*\*\*\*鹿屋体育大学客員教授(笹川スポーツ財団)

所(14市62町16村5地域)の自治体や地域および983,737人の人々が参加した。今やチャレンジデーは、日本において地域における生涯スポーツイベントの一つとして定着してきていると言えよう。

これまで、地域におけるスポーツイベントの満足度や評価については数多く報告されているが<sup>(1)-3), 5)-7), 9)-19)</sup>, チャレンジデーに関する報告は著者らが知る限り見当たらない。また、これまでのイベント評価に関する研究は、開催直後だけの評価に焦点を当てて検討されたものが多く、開催後の評価の推移から検討した研究は見当たらない。スポーツイベントには地域活性化やスポーツ振興などの効果も期待できるため<sup>(1), 5), 7), 10), 12)</sup>, 参加者や住民が開催直後に一時的に高い評価を示すよりも、開催数ヶ月後も開催直後と同等の評価を示すことが重要であると考えられる。以上のことより、本研究ではチャレンジデーに対する地域住民の評価を明らかにするために、鹿児島県A町の住民を対象に「チャレンジデー2004」の開催直後、4ヶ月後、1年後の計3回、質問紙調査を行なったので報告する。

## II. 方法

### 1. 調査対象

本研究では、鹿児島県A町の20歳以上の住民を

調査対象とした。A町は、鹿児島県大隅半島の東部に位置する農業を中心とした人口11,778人(平成17年度国勢調査)の町である。

### 2. 調査の概要

本研究では、2004年5月26日に開催された「チャレンジデー2004」に参加した鹿児島県A町の住民に対し、開催直後(2004年6月)、4ヶ月後(同年9月)、1年後(2005年5月;「チャレンジデー2005」の開催3週間前)の計3回、質問紙調査を行った。表1に調査の概要を示した。

調査内容は、1)個人的属性、2)運動・スポーツ実施状況、3)チャレンジデーの評価である(表2)。チャレンジデーの評価項目においては、スポーツイベントが地域社会へ与える効果として期待される、住民意識、地域活性化、イメージづくり、スポーツ振興<sup>(1), 5), 7), 10), 12)</sup>を基に、「地域のイメージづくり・宣伝」「地域および住民の運動・スポーツ活動」「住民参加」「経済効果」に関する計17項目を設定した。

### 3. 分析方法

チャレンジデーの評価項目には、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の評価順に1~5の得点を与え、間隔尺度を構成するものと仮定して数量化した。

表1. 調査の概要

	開催直後	4ヶ月後	1年後
調査時期	2004年6月	2004年9月	2005年5月
調査方法	一部の校区の小組合長に調査の協力を依頼し、住民に対しての質問紙の配布・回収をお願いした。また、A町役場職員とS社職員の一部に対して質問紙を直接配布し、回答してもらった。	年齢に基づいて無作為に層化抽出し、郵送法による質問紙の配布・回収を行なった。	全校区の小組合長に調査の協力を依頼し、住民に対しての質問紙の配布・回収をお願いした。
配布数	700部	2,000部	2,000部
回収数(率)	328部(46.9%)	911部(45.6%)	800部(40.0%)
有効回答数(率)	235部(71.6%)	896部(98.3%)	585部(73.1%)

表2. 調査内容

要因群	調査項目
1. 個人的属性	性別 年齢 職業 校区
2. 運動・スポーツ実施状況	主に行なっている運動・スポーツ種目 頻度 時間 強度 継続期間
3. チャレンジデーの評価	<p>【地域のイメージづくり・宣伝】</p> <p>町の知名度が上がった スポーツが盛んな町というイメージを高めた 報道されたことが町の良い宣伝になった</p> <p>【地域および住民の運動・スポーツ活動】</p> <p>町のスポーツ振興に役立った 地域で行われる他のスポーツ活動も活発になった 町のスポーツ施設が充実した 子供たちのスポーツ活動に良い影響を与えた 住民の体力向上につながった 住民の競技力向上につながった 住民の運動・スポーツに対する意識を高めた</p> <p>【住民参加】</p> <p>多くの住民が参加した 若者が参加した 高齢者が参加した 女性が参加した</p> <p>【経済効果】</p> <p>地域経済に役立った 観光客の伸びにつながった 医療費削減につながった</p>

この得点について、まず全体の傾向を把握するために平均値を算出した。次に、チャレンジデー開催直後、4ヶ月後、1年後の評価の推移を検討するために、一元配置分散分析を用いて各期の評価を比較した。また、その後の検定には Bonferroni による多重比較を用いた。

分析には統計解析パッケージ SPSS for windows ver.11.5 を用い、有意水準は全て  $P < 0.05$  とした。

### Ⅲ. A町における「チャレンジデー2004」の概要

2004年5月26日に開催された「チャレンジデー2004」は、A町にとって初めてのチャレンジデー開催となった。A町ではチャレンジデー開催を迎えるにあたり、開催1～2週間前にチャレンジデー係を対象とした説明会が行なわれた。チャレンジ

デー係とは、各集落で参加登録用紙（当日、15分間以上継続して運動・スポーツを行なったことを申告する用紙）を配布・回収する係のことである。この説明会では、チャレンジデー実行委員会が係に対してチャレンジデーの概要と仕事内容について説明し、地域住民の参加を促すように依頼した。また、説明会の最後では、係が各集落の住民に対してストレッチの指導を行なえるように、K体育大生とA町役場地域スポーツ振興係によるストレッチの講習も行われた。

当日は、町内各地の広場、職場、学校などでラジオ体操、ストレッチ、スポーツ・レクリエーション、ゲートボール大会、バトンリレーマラソンなど、数多くのイベントが行なわれた。SSFの公式発表によると、この日のA町の参加率は82.4%であり、全国の平均参加率（63.5%）を大きく上回った。実に多くの住民が参加したことが伺える。ま

た, 対戦地域の参加率は78.7%であり, A町が勝利を収めた。

#### IV. 結果および考察

##### 1. サンプルの属性

表3に本研究におけるサンプルの属性を示した。性別を見ると, 開催直後では男性の割合が高く, 4ヶ月後, 1年後では女性の割合が高かった。年齢を見ると, どの調査時期においても概ね40~60歳代に集中していた。職業を見ると, 概ね自営業, 会社員, 公務員の割合が高かった。

##### 2. 運動・スポーツ実施状況

表4に運動・スポーツ実施状況を示した。頻度, 時間, 強度, 継続期間に関係なく, 運動・スポーツを行なっている者を実施者, 全く行っていない者を非実施者とした。開催直後, 4ヶ月後, 1年後ともに, 実施者は40%前後であった。

主に行なっている運動・スポーツ種目を見ると, どの調査時期においても散歩(ぶらぶら歩き), ウォーキング, ラジオ体操が概ね上位に位置していた(表5)。

##### 3. チャレンジデーの評価

チャレンジデーの評価項目について5段階尺度で回答してもらい, 「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の評価順に1~5の得点を与え, 間隔尺度を構成するものと仮定して数量化した。なお, 得点が高いほど評価が高いことを示す。

表6に開催直後, 4ヶ月後, 1年後の評価の推移を示した。どの調査時期においても, 「多くの

住民が参加した」が最も高い評価を示し, この他にも「高齢者が参加した」「女性が参加した」といった住民参加に関する項目が概ね上位に位置していた。当日のA町の参加率は82.4%と実際に多くの住民が参加していたことから, 今回の評価に

表3. サンプルの属性

	開催直後 (n = 235)	4ヶ月後 (n = 896)	1年後 (n = 585)
	n (%)	n (%)	n (%)
<b>【性別】</b>			
男性	138(58.7)	399(44.5)	277(47.4)
女性	95(40.4)	481(53.7)	303(51.8)
N. A.	2(0.9)	16(1.8)	5(0.9)
<b>【年齢】</b>			
20歳代	27(11.5)	59(6.6)	17(2.9)
30歳代	55(23.4)	88(9.8)	50(8.5)
40歳代	65(27.7)	168(18.8)	100(17.1)
50歳代	51(21.7)	212(23.7)	166(28.4)
60歳代	26(11.1)	192(21.4)	129(22.1)
70歳以上	11(4.7)	177(19.8)	123(21.0)
<b>【職業】</b>			
自営業	26(11.1)	227(25.3)	181(30.9)
会社員	60(25.5)	188(21.0)	121(20.7)
公務員	66(28.1)	38(4.2)	11(1.9)
パート・アルバイト	32(13.6)	104(11.6)	59(10.1)
専業主婦	11(4.7)	104(11.6)	52(8.9)
学生	0(0.0)	5(0.6)	0(0.0)
無職	12(5.1)	125(14.0)	75(12.8)
その他	17(7.2)	56(6.3)	46(7.9)
N. A.	11(4.7)	49(5.5)	40(6.8)

表4. 運動・スポーツ実施状況

	開催直後	4ヶ月後	1年後
	n (%)	n (%)	n (%)
実施者	99(42.1)	356(39.7)	206(35.2)
非実施者	127(54.0)	518(57.8)	342(58.5)
N. A.	9(3.8)	22(2.5)	37(6.3)

表5. 主に行なっている運動・スポーツ(上位5種目)

開催直後		4ヶ月後		1年後	
1. 散歩(ぶらぶら歩き)	16.2%	1. グラウンドゴルフ	23.3%	1. グラウンドゴルフ	24.3%
2. バレーボール	12.1%	2. 散歩(ぶらぶら歩き)	16.6%	2. ラジオ体操	15.5%
3. ウォーキング	11.1%	3. ラジオ体操	12.6%	3. 散歩(ぶらぶら歩き)	14.6%
4. グラウンドゴルフ	8.1%	4. ウォーキング	11.0%	4. ウォーキング	8.3%
4. ソフトボール	8.1%	5. ストレッチ	5.9%	5. ストレッチ	5.3%
4. ラジオ体操	8.1%	5. バレーボール	5.9%		

表6. チャレンジデーの評価の推移

	開催直後			4ヶ月後			1年後			P
	n	MEAN	SD	n	MEAN	SD	n	MEAN	SD	
<b>【地域のイメージづくり・宣伝】</b>										
町の知名度が上がった	230	3.41	1.06	768	3.28	1.08	523	3.11	1.06	** <sup>a)</sup>
スポーツが盛んな町というイメージを高めた	230	3.32	1.01	759	3.18	1.07	519	3.08	1.03	* <sup>b)</sup>
報道されたことが町の良い宣伝になった	227	3.89	1.03	759	3.79	0.99	512	3.53	1.04	*** <sup>a)</sup>
<b>【地域および住民の運動・スポーツ活動】</b>										
町のスポーツ振興に役立った	229	3.62	0.99	756	3.44	0.99	511	3.40	1.04	* <sup>c)</sup>
地域で行われる他のスポーツ活動も活発になった	225	3.11	0.84	745	2.97	0.91	510	3.04	0.95	
町のスポーツ施設が充実した	224	2.67	0.96	735	2.59	0.97	502	2.73	0.95	
子供たちのスポーツ活動に良い影響を与えた	226	3.60	1.02	729	3.54	0.98	496	3.52	0.97	
住民の体力向上につながった	225	3.49	1.04	742	3.44	1.01	508	3.42	1.03	
住民の競技力向上につながった	225	3.17	1.00	742	3.21	0.97	501	3.18	0.97	
住民の運動・スポーツに対する意識を高めた	226	3.46	0.94	739	3.34	1.00	501	3.38	0.98	
<b>【住民参加】</b>										
多くの住民が参加した	230	4.03	0.99	749	3.94	1.01	506	3.85	0.98	
若者が参加した	222	3.50	0.92	727	3.45	0.98	502	3.40	1.00	
高齢者が参加した	227	3.90	0.96	736	3.75	0.93	502	3.72	0.96	* <sup>b)</sup>
女性が参加した	224	3.71	0.95	724	3.65	0.88	492	3.65	0.90	
<b>【経済効果】</b>										
地域経済に役立った	225	2.92	0.97	737	2.83	0.94	505	2.84	0.93	
観光客の伸びにつながった	222	2.77	0.86	737	2.54	0.96	496	2.68	0.91	*** <sup>d)</sup>
医療費削減につながった	229	3.08	0.96	747	2.98	1.04	503	3.01	1.00	

\*\*\*:P&lt;0.001 \*\*P&lt;0.01 \*P&lt;0.05

a) 開催直後, 4ヶ月後&gt;1年後

b) 開催直後&gt;1年後

c) 開催直後&gt;4ヶ月後, 1年後

d) 開催直後&gt;4ヶ月後; 1年後&gt;4ヶ月後

も反映したと思われる。チャレンジデーは対戦地域と住民の参加率を競うイベントであるため、チャレンジデー独特の傾向とも言えよう。

反対に、「地域経済に役立った」「観光客の伸びにつながった」「医療費削減につながった」といった経済効果に関する項目は、どの調査時期においても下位に位置しており、特に「地域経済に役立った」「観光客の伸びにつながった」は評価の平均値が3.0を下回っていた。チャレンジデーは外部からも参加者を募って催すスポーツイベントではなく、その自治体に在住する地域住民が主体となるスポーツイベントであるため、地域の経済効果に影響を与えるまでには至っていないと考えられる。

「町の知名度が上がった」「スポーツが盛んな町というイメージを高めた」「報道されたことが町

の良い宣伝になった」といった地域のイメージづくり・宣伝に関する項目は、開催直後が有意に最も高い評価を示し、4ヶ月後、1年後とチャレンジデー開催から時間が経過するとともに低下していた。チャレンジデー当日はテレビ局やラジオ局が取材に来ており、翌日の新聞にもA町のチャレンジデーの記事が掲載されていた。このように、開催直後はマスメディアによる報道が、多くの住民に対して町のイメージや知名度が向上したと強い印象を与えたと考えられる。しかし、開催後も長期的に報道されたわけではなく、開催直後に一時的に報道されただけである。そのため、時間の経過とともに印象が徐々に薄れていき、住民の評価の低下につながったと考えられる。

「町のスポーツ振興に役立った」も開催直後が有意に最も高い評価を示し、4ヶ月後、1年後と

チャレンジデー開催から時間が経過するとともに低下していた。しかし、「地域で行われる他のスポーツ活動も活発になった」「子供たちのスポーツ活動に良い影響を与えた」「住民の運動・スポーツに対する意識を高めた」といった地域および住民の運動・スポーツ活動に関する項目は、どの調査時期においても安定して概ね肯定的な評価を示していた。地域のスポーツ活動の発展や住民の運動・スポーツに対する意識の向上は最終的に地域のスポーツ振興につながると考えられる。したがって、チャレンジデーは地域のスポーツ振興のきっかけになったことが示唆される。

本研究における3回（開催直後、4ヶ月後、1年後）の調査は、同じ対象者を調査したものではなく、そのため性別、年齢、職業の構成が若干異なっていた。したがって、厳密な時系列的変化であるとは言い難い。しかしながら、各調査においては無作為化を試み、またその数も2,000部（開催直後のみ700部）であった。回収率には若干の問題もあるが、それぞれの調査において集団を代表するサンプリングは行なわれたものと思われる。したがって、本研究の結果は調査方法に若干の問題こそあるものの、チャレンジデーなどのスポーツイベントの効果を検証する際の基礎資料として有効と考える。

## V. まとめ

本研究では、チャレンジデーに対する地域住民の評価を明らかにするために、鹿児島県A町の住民を対象に「チャレンジデー2004」の開催直後、4ヶ月後、1年後の計3回、質問紙調査を行った。主な結果は次のとおりである。

- 1) A町住民は、住民参加に関する項目には高い評価をしており、経済効果に関する項目にはそれほど高い評価をしていなかった。
- 2) 地域のイメージづくり・宣伝に関する項目の評価は、チャレンジデー開催から時間が経過するとともに低下する傾向にあった。

- 3) 地域および住民の運動・スポーツ活動に関する項目は、開催直後、4ヶ月後、1年後のどの調査時期においても、概ね肯定的な評価を示した。

地域のスポーツ活動の発展や住民の運動・スポーツに対する意識の向上は最終的に地域のスポーツ振興につながると考えられる。したがって、チャレンジデーは地域のスポーツ振興のきっかけになることが示唆される。

## 謝 辞

本研究に多大なご協力を戴いた鹿児島県A町役場職員の皆様および住民の方々に厚く御礼申し上げます。

## 主要引用参考文献

- 1) 天野郡壽・山口泰雄・神吉賢一・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(2) - ウォーカーの期待と満足 - . 日本体育学会第43回大会号A : 171.
- 2) 石澤伸弘・野川春夫・國本明德・三島和康 (1997) スポーツツーリストのイベント評価に関する研究 - プロウォーカーに着目して - . 日本体育学会第48回大会号 : 164.
- 3) 太田繁・太田あや子・大橋理恵・野川春夫・萩裕美子・松本耕二 (1990) トライアスロン参加者の満足要因の分析. レクリエーション研究23 : 38-39.
- 4) 川西正志・野川春夫 (2002) 生涯スポーツ実践論 - 生涯スポーツを学ぶ人たちに - . 市村出版 : 東京, pp196-206.
- 5) 菊池秀夫・野川春夫・山口泰雄・長ヶ原誠 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(3) - 地域活性化の視点から - . 鹿屋体育大学学術研究紀要6 : 77-84.
- 6) 北村尚浩・川西正志・波多野義郎・柳敏晴・萩裕美子・前田博子・野川春夫 (2000) 生涯スポーツイベント参加者の大会満足度 - 菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較 - . 鹿屋体育大学学術研究紀要23 : 25-31.
- 7) 北村尚浩・野川春夫・柳敏晴・川西正志・萩裕美子・前田博子 (1997) スポーツイベントによる地域活性化への効果 - 開催地住民の評価に着目して - . 鹿屋体育大学学術研究紀要17 : 47-55.
- 8) 笹川スポーツ財団ホームページ <http://www.ssf.or.jp/>
- 9) 高見彰・神吉賢一・土肥隆 (2002) 地域住民のウォー

- キングイベント評価に関する研究 - 世代による比較分析 -. 日本体育学会第53回大会号: 231.
- 10) 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) - ボランティアの継続意欲の視点から -. 鹿屋体育大学学術研究紀要6: 69-76.
- 11) 土肥隆・神吉賢一・高見彰 (2002) 地域住民のウォーキングイベント評価に関する研究 - 全体の傾向と性別による比較分析 -. 日本体育学会第53回大会号: 230.
- 12) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (1) - イベント参加者の視点から -. 鹿屋体育大学学術研究紀要6: 57-67.
- 13) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・松本耕二 (1991) スポーツイベントへの評価に関する比較研究 - ホノルルマラソンVS指宿菜の花マラソン -. レクリエーション研究25: 36-37.
- 14) 野川春夫・萩裕美子・國本明德・松本耕二 (1993) 生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) - イベント運営評価と継続意欲の関連について -. 鹿屋体育大学学術研究紀要10: 11-23.
- 15) 萩裕美子・國本明德・野川春夫・山口泰雄 (1997) トライアスロン参加者のイベント評価に関する研究 - タイプ別にみたイベント評価および参加継続意欲に影響をおよぼす要因について -. 鹿屋体育大学学術研究紀要17: 73-84.
- 16) 萩裕美子・國本明德・松本耕二 (1994) 全国レベルスポーツイベントのマネジメントに関する研究 - トライアスロン参加者の大会参加経験から見たイベント評価 -. 鹿屋体育大学学術研究紀要12: 27-39.
- 17) 萩裕美子・野川春夫・柳敏晴・國本明德 (1993) 生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (1) - 県レベルイベントの運営評価 -. 鹿屋体育大学学術研究紀要10: 1-10.
- 18) 松本耕二・野川春夫 (1991) ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析 - 日本人完走者を対象者として -. レクリエーション研究25: 38-39.
- 19) 松本耕二・萩裕美子・野川春夫・山口泰雄 (1994) スポーツイベント評価と継続意欲に関する研究 - 居住地とイベント開催地との距離に着目して -. 日本体育学会第45回大会号: 180.